

阪急宝塚線開通 110 年・宝塚市立中央公民館グランドオープン一周年記念

小林一三と宝塚

小林一三氏は、1873（明治6）年、現在の山梨県韮崎市に生まれました。「一三」（いちぞう）の名は、誕生日の1月3日に因みます。19歳の時に慶應義塾を卒業し、三井銀行で本店勤務の後、大阪支店に赴任します。元来、文学青年で小説家志望であった一三氏ですが、銀行員時代の先輩達との出会いから事業の面白さに目覚めていき、1907（明治40）年、三井銀行を退職し、箕面有馬電気軌道（現・阪急宝塚線・箕面線）を創立します。1910（明治43）年運行を開始した電車事業は、沿線の住宅開発と共に進行という独創的なアイデアによって好調なスタートを切りました。1920（大正9）年には神戸線が開通し、社名も阪神急行電鉄と改め「阪急電車」として親しまれます。一方梅田駅（現大阪梅田駅）には、1929（昭和4）年、阪急百貨店（現・阪急うめだ本店）を開業し、洋食をメインとした大食堂は大人気となりました。また、宝塚歌劇や阪急ブレーブス、そして映画・演劇の東宝を設立するなど、たくさんの人たちが楽しむ事業を次々に成功させてきました。

一三氏のユニークな発想から生まれたビジネスモデルは、私鉄経営を始めとする各地の事業者達に影響を与えまた、一三氏個人としても幅広い著作を遺した文化人としての素顔を持ち、日常の暮らしの中では、趣味の俳句や茶の湯を通じて多くの人々との交流を楽しみました。多方面に足跡をのこした一三氏は、1957（昭和32）年、享年84歳で没しました。

たからづか みらい ていだん 宝塚未来鼎談

2月8日（土）14:00～

一三氏が存命だったら！「小林一三と宝塚のプロモーション」次の一手は。

阪急宝塚線は、最初に開業した路線であり2020年は開通110年の区切りの年となります。阪急電車と宝塚のまちの関係は深く、伝統ともいえる車両の"あずき色"正式には「マルーン色」といいますが、まちには無くてはならない色となっています。そして、その産みの親である小林一三氏は、切っても切れない深い関係と言えます。

お客様への新たな生活と楽しみ、ライフスタイルを総合的に提案することを第一とした一三氏の精神は、現在も様々な形で会社に受け継がれ、創始した数々の社会事業・文化事業は、今もなお発展を続けています。

もし、一三氏が存命であったら、宝塚の次のプロモーションはどんな事なんだろう……宝塚ファンのメンバーが想いおもいの一三氏を語ります。



仙海義之
(逸翁美術館館長)



榛名由梨
(女優、宝塚市大使)



薮下哲司
(映画・演劇評論家、元スポーツライター)



MC : 木村三恵
(エフエム宝塚パーソナリティ)